

## 厚岸町における景観生態学からみたカメムシ目昆虫の種多様性構造

奥寺 繁<sup>1)</sup>, 荒井凌斗<sup>1)</sup>, 伊藤佑悟<sup>1)</sup>, 山本亜生<sup>2)</sup>, 林 正美<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 北海道教育大学旭川校理科教育専攻

<sup>2)</sup> 小樽市総合博物館

<sup>3)</sup> 埼玉大学教育学部

**【研究の背景】** 北海道レッドデータに記載されているカメムシ目昆虫の希少種30種のうち、湿地および海浜環境に関わるものが約半数を占めるため、厚岸湖および別寒辺牛湿原の生物相調査は不可欠である。しかし地域の種多様性の維持形成は自然度の豊かな環境だけでなく、産業やヒトの営みがかたちづくる様々な「景観」においても独自の多様性が形成されている。これらの景観には、市街地や公園（住居）、沿岸や漁村（漁業）、牧草地や耕地（農業）および町営林や林地（林業）なども含まれ、これらは厚岸町を構成する重要な景観である。しかし、これら景観における生物相調査が着目されることは少ない。そこで本研究は、景観ごとのカメムシ目昆虫相を調査し、産業やヒトの生活が種多様性の維持形成にどのように関連しているか検討し、厚岸町全体における種多様性構造の解明を目的とする。

### 【研究方法】

**【調査地】** 湿原の調査を水鳥観察館周辺で行うとともに、4種類の景観（住居、農業、漁業、林業）ごとに3カ所ずつの調査地域を設定する。①住居（門静、住の江、湾月）②農業（尾幌、太田、若松）③漁業（門静、奔渡、筑紫恋）④林業（苫多村、別寒辺牛、愛冠）。

**【調査方法】** 採集は捕虫網による樹木や草本類の掬い取り、及びエンジンブローア（大型吸引機）による地表面や根際の採集を行う。また夜間にライトパントラップ（水盆に小型ライトを置いたもの）や大型ライトトラップ（発電機と水銀灯）を設置して遠方の人が踏み込めない場所の昆虫を誘引し採集を行う。

### 【結果と考察】

これまで厚岸町からは10種のカメムシ目昆虫が記録されているのみであったが、本研究により新たに238種が確認された。そのうち5種が北海道レッドデータに記載の希少種であった。また厚岸町の4景観ごとに絞り種数を比較すると、林業（66種）>住居（49種）>農業（48種）>漁業（31種）となった。また各景観のJaccard 類似度指数、B $\psi$  多様度、Warwick & Clarke の分類学的多様度指数を求め、各景観の類似度や多様度の比較を行った。